

ネパール ビラトナガルおきなわスクール訪問記

HIV 人権ネットワーク沖縄 比嘉正央

2017年12月15日より25日までの日程で、ネパールを訪問しました。
学校のあるビラトナガル市はインド国境沿いの街。この季節のビラトナガルは朝方濃い霧に包まれ、首都カトマンズからの飛行機も4時間遅れで出発しました。

飛行機の窓の左手にあるエベレストがずっとその姿を映し出し、見送ってくれているかのようにでした。

今回の学校訪問は1年半ぶり。先のインド・ネパールを襲った洪水で多数の方が被害にあっています。そんなこともあり、今回の訪問は急ぎ計画したものでした。

おきなわスクールは貧困層のための学校。4学年に現在80名の生徒が在籍しています。貧しい方々の集落は低地に集中していて、泥と藁を組み合わせた質素な家はいくらに流されてしまいます。25人の子供が家を失っていました。

しかし、そんな中でも先生も子どもたちもとても元気でした。

まずはそんな学校生活のことから報告しましょう。

★元気に学ぶ子供たち

朝10時15分から授業が始まります。

校庭に生徒職員全員が集合



リーダーの指示の下、祈りと校歌を歌い、体操をしてそのまま行進しながら教室へと入っていきます。朝一番で安らかな心に出会う大切な時間です。



私に来ることを知っている子どもたちは、一人ひとりがプレゼントを持ってきます。家の近くでとった花や自分で作ったもの。机の上はすぐにプレゼントで一杯になりました。子どもたちは誰が来てもこのように歓迎する優しい子どもたちです。

特に英語の授業では、かなり習得が進んでいます。



はじめは、ほとんどの子が方言しか話せないところからスタートします。

しかし、先生方の一人ひとりにしっかりと目をかけた指導で、英語の授業もかなりの進捗がみられました。何より素晴らしいのは、子どもたちの集中力です。

学年は日本で言うところの保育園クラス、幼稚園、小学校1年・2年の4つになります。

しかし、年齢層はまちまちです。10歳位ではじめて学校に通ってきた子供もいるからです。そんな中でどの学年も分け隔てなく仲良くしています。

★ダンスの披露

高学年のクラスによる歓迎のダンスの披露会がありました。

始めの頃はダンスの授業でも恥ずかしがり、踊ること事態や人前に出ることもおっくうがっていた子どもたちが、私の前で素晴らしい民族ダンスを男女混ざって披露してくれまし

た。自信に満ち、楽しそうに踊る子供の姿は眩しささえ感ずるほどでした。この素晴らしいダンスの動画を HP で公開したいと思います。ぜひ御覧ください。



沖縄から持参したプロジェクターを使い HIV 人権ネットワークの活動の様子を見る先生と子どもたち

★おきなわスクールを卒業した後の課題

沖縄スクールは小学校2年までの学校なので、3年生からは子どもたちは政府が運営する無料の学校に通うことになります。沖縄スクールの子供達は成績が皆優秀なため、自分の年齢に応じた学年に飛び級で配置されます。つまり、本来5年生になる年齢の子供がその年で沖縄スクールの2学年を終えたときに、成績が認められ5年生になるということです。この子どもたちの学習能力の高さはビラトナガル市でも注目されていて、今でも多くの教育関係者が視察に訪れるほどです。

しかし、大きな課題もあります。実績が認められたおきなわスクールは政府から6学年までの運営許可が出されました。しかし、あと4学年増やすことは校舎にしても運営費にしても多額の予算が必要となります。保護者も子どもたちもずっとおきなわスクールでの学びを熱望していますが、それに応えるためには私達自身の課題を克服しなければなりません。

★給食の改善





貧困層であるおきなわスクールの子どもたちにとって学校の給食は大切な栄養補給の機会です。菜食のみのメニューの中で、ビラトナガルでは容易に手に入れない牛乳を週2回メニューに入れ、それ以外にもタンパク質を含んだ豆や野菜をふんだんに入れるように改善していきました。給食ではほぼ全員の子供が完食しています。



給食後は担当の職員が洗いやすいように、すすぎを自分たちでやっています。



給食後の清掃も役割分担で各自がしっかりとこなします。

★ある事故の教訓から



子どもたちは休み時間も元気に校庭で遊びます。

滑り台やブランコで果敢にいろんな技に挑戦するのはどの子も同じ。そんな中、活発な男の子の一人が腕を骨折する事故が起きてしまいました。

日本であれば校内の事故に対して保険が適用されます。しかし、ネパールにそんな制度は確立されていません。通常はその場合、家庭が治療費などを負担するのですが、しかしこの子どもたちの家庭にそんなお金を出せません。

この時は先生方がお金を出し合って治療費の8000ルピーを出したそうです。そのお金は一人の先生の給与に値するほどのお金です。

そこから学んだこと、それはやはり「私たちは家族である」ということでした。家族ならどんな状況でも親が子を守りお金を惜しみません。こんなスタンスこそ、私達に必要なものだ和理解しました。そして入学依頼ずっと気になっている男の子がいます。



左目に障害があります。物静かな子ですが、とても真面目です。

いつの日かこの子の眼についても、考えていかなければなりません。

★第2次支援活動

大雨と洪水がインド・ネパールを襲ったときは、生徒の25の家庭が家を失い、幸いにして家が流されなかった家庭にも推進1メートル近くの浸水が押し寄せました。

その時、先生方は皆で果敢に支援活動を行いました。家を失った家族は、現在も親戚の家などを転々として暮らしています。

第2次支援活動は沖縄県立西原高校生徒会らの支援金や個人の方から頂いたカンパで行っていきました。



ネパール出発前に支援金を届けてくれた生徒会の先生と代表生徒

12月の寒さの中でやはり必要なのは、毛布や寝具です。そして食料。支援金を有効に使い、どの家族にも満足行く品を届けました。



家を失った子どもたちも放課後は元気で遊んでいました。「なんくるないさ」の子供の特徴はいつでも希望そのものです。

やがて、この地に、再び家族の絆を取り戻す家々ができることを信じて、さらにサポートを続けていきたいと思います。

★先生たちの感謝と決意の言葉

私が学校を去る前の最後のミーティングで、改めて先生方の日頃のご苦勞に感謝を述べました。こんな素敵な先生や子どもたちがいるからこそ、私達も奉仕の機会を得ることができるのです。

学校の運営は、全国で沖縄の子どもたちが演ずる人権劇の補助金や毎月支援金をくださるサポーターからの支援、その他、HIV 電話相談事業や講演活動、また毎年行ってくれる西原高校のようなカンパ金などで行っています。個人でカンパくださる方の中には HIV 当事者の方もいます。

ネパールの先生方もこのことをよく理解していて、事あるごとに子どもたちにも支援をくださる人々への感謝の気持ちを持つことを伝えてくださっています。

そしてミーティングの中でも一人ひとりがその気持ちを私に伝え、これからも頑張る決意を述べてくれました。

このミーティングには、誰もが深い愛を感じたことでしょう。素晴らしい時間でした。



ネパールでの最後の訪問地に、ネパール最大の聖地ムクティナートを選びました。標高3600メートルを越す秘境の地を歩いて訪れました。

そこで、個々への特別な祈りと関係者の皆様の幸せを世界の平和とともに祈らせていただきました。

この広い世界の中で出会えた皆様に心から感謝いたします。
どうぞこれからもご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。